

## 『信仰により高あーい希望を！』 ～業は低いところから！！～

ローマ5：1～8

みなさんは、神さまの喜びと恵みに満たされて日々過ごしていますか？これが私たちにとって一番大事なことです。神さまは、私たちが喜びと感謝と恵みと希望に満ちあふれた道を歩むために、自らがわざわざ絶望・失望・苦しみの道を歩まれたのです。だから、私たちが希望と喜びに満たされていないとイエスさまの十字架は無意味になってしまいます。しかし、私たちが神さまの与えてくださった恵みを知ることが出来たら私たちは無意味ではなくなります。そもそも、意味とは何ですか？意味の有無って何ですか？私たちは意味の有無を、役に立つか立たないと判断してしまいます。ですが、役に立つから意味があるという訳ではありません。私たちが無意味だと思ってしまふ、つまり望みを無くしてしまう、失望してしまう事が起きてしまうのかを考えていきましょう。それでは、失望はいつやってくるのでしょうか。あなたは失望していませんか？ここでアーメンと言えれば素晴らしい！イエスさまが十字架にかかられたのは私たちが希望に満ちあふれるためです。「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。」(I コリ13:13)と書かれています。この信仰・希望・愛の3つが揃っていなければ意味がありません。信仰というと宗教っぽいですが単純に信じる心を受け入れるという意味だけです。信じる気持ちを持っていますか。神さまのことが信じられれば神さまが愛している隣の人のことも信じられます。私たちは、「あの人は変わらない」と人のことを信じられなくなってしまいがちですが、神さまが最初に人を型造られた時に完璧にされました。ただ生きている間に失望などを経験して曇ってきているだけなのです。また神さまの光を輝かせれば何の問題もありません。前回語られていたことに「人に対してがっかり(失望)する理由は自分のためにしているからだ」と言うことがありました。私たちは、神さまという限り失望に終わることはないのです(ローマ5:1～8)。なぜならばこの希望は失望に終わることがありません。なぜなら、「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。(5節)」と書かれているからです。愛が注がれると希望は失望に終わることがないのです。私たちは神さまからいつも無条件の愛・私たちのことを丸ごと愛する愛が注がれているから失望に終わらないのです！アーメン。だから神さまから愛されて希望が与えられている私たちがしなければいけないことは、その希望をどうするかを考えることです。みなさんは「希望は何ですが」と訊ねられて答えられますか？私たちの問題は、神さまが与えてくれた希望がなんなのかを知らないことです。留岡幸助、石井十次などの偉人も悲しみの中にあっても神さまから希望を見せられ知り前へ進みました。ですから、私たちは『信仰により高あーい希望を！』もち、～業は低いところから！！～来ることを覚えておく必要があります。私たちが、具体的にどんな風に神さまの光を放って歩むのかを知り、信仰によりそれを信じなければいけません。信仰と希望を保証するものが愛なのです。愛が与えられたから信じる事が出来る、信じる事が出来るから信じている神さまが私たちの希望を叶えてくれる、そうするとさらに神さまのことが信じられる…と、言うことなのです。だから私たちは神さまを信じると同時に「〇〇になるんだ」という希望を持たなくては意味がありません。留岡幸助の場合は犯罪者の更生でした。人の変わる姿を見て「囚人から希望をもらった」と言ったのです。私たちが何かをしてあげるから希望が与えられるのではありません。色々なところを見て希望が与えられるのです。神さまを信じて希望を持つ人は「主を待ち望む」事が出来ます。人は待つことが苦手です。でも待たなければ経験できないことがあります。(詩篇33:17～22)恵みがあるのは主を待ち望んだからです。望んだだけではなく“待ち”望んだからです。私たちは待つのが苦手なので諦めてしまいます。そうするとそれで全てが終わります。これが絶望です。失望・絶望はいつやってくるの？の答えは諦めた時です。信じる→待てない→諦める→失望、でもまた信じてみる…これが悪いサイクルです。しかし、希望は失望に終わらないと書かれていました。私たちが失望に終わらないためにイエスさまは十字架にかかられました。これがイエスさまの成された奇跡です。「もう一回やってみようかな」と前進する心を与えてくれます。イエスさまは私たちに「待ち望む時に考える」ことを教えてくださいました。試練・試みにあった時は神さまが「心を見る」時だと語られたことがあります。試みにあった時こそ神さまは「What If(もし、こうなったら…)を、待ち望んでいる間に考えなさい」と言われているのです。試みにあった時こそ考えるべき事があるのに私たちは、「疲れるから」と言ってそれを止めてしまいます。考えることを止めてしまったら本能で行動する動物と同じです。私たちにとって考えることが大切なのです。考えることは自分の悪かったところを認めることになるので疲れます。でもダビデは「苦しみにあったことは幸いです。神さまと一緒にいてくれることが分かったからです。(詩篇119:71)」と祈っています。ダビデも私たちと同じ人間で罪も犯しました。でもダビデの素晴らしかったことは神さまに指摘されたことは素直に受け入れ悔い改めたのです。私たちはどうでしょう。ふてくされたり逆ギレしてないでしょうか。「もう知らない」と考えることを止めていませんか。ぜひWhat If(もし、こうなったら…)を、考えてください。(ヘブル10:22～24)そして、人のせいにしないで、もしこうなったら…をどうするのかを考えてください。そうすれば神さまは真実な方なので、試練を克服することが出来ます。問題を乗り越えられます。「今度私はこうなる！」と宣言できます。だからこそ希望は高くもってください。だからこそ業は低いところから起こります。愛と善行をお互いに促すためには低いところからやると言うことです。そうすれば必ず前進し、同じ問題で悩むことはなくなります。素晴らしい人生に変えられます。そして「失望を与えない」ようになります。そして、人々に希望を与えるようになります。神さまが私たちに希望を与えてくださったのですから、私たちも周りの人々に希望を与えなくてははいけません。私たちも人間ですから間違ふこともあります。そこでとる行動が大切です。ダビデのように素直に受け入れ悔い改めをすることが大切です。私たちを通して神さまの素晴らしい御業がなされます。(I ペテロ3:15・16)

今回ぜひして欲しいことは、①自分に与えられた希望は何なのかをもう一度知る。②そしてそれを行ったらどうなるのかWhat If(もし、こうなったら…)を考える。③そしてそれができれば光り輝きながら周囲の人々に希望を与えることが出来ることを知る。です。そうすると自分のことを裁いていた人、嫌いな人さえ変わります。イエスさま自分を裏切り罵る人たちのために十字架にかかられました。それは、その時の民衆を見たからではなく未来の変えられた姿を見ていたからです。神さまは私たちの未来の素晴らしく変えられた姿も見られています。であれば、私たちも自分が一番絶望している人のことを見なければいけません。そしてその人の将来に希望をもって歩みましょう。そうすればその希望のとおりになるからです。神さまは苦しみと戦っている私たちを無下には扱いません。だから途中で諦めないで戦いぬきましょう。考えぬきましょう。イエスさまが十字架から逃げなかったようにやり遂げましょう。そうすると私たちは成長します。そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。「それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです(3・4節)」と書かれているとおりです。(ヘブル10:37～12:4)神さまは、私たちが失望し元気を失わないために十字架にかかられました。ですから私たちもその神さまを信じて先人たちのようなヒストリーメーカーになりましょう。(要約者：行司 佳世)